

東京で唯一、木造の寄席を残し 笑いを温かく見守るまち 新宿

区長：新宿末廣亭は、東京に4軒ある「定席」の寄席で落語などの興行を毎日行なっています。たい平さんにとってどんな場所ですか。

たい平：落語家を目指した頃が一番憧れの場所です。江戸の香り、落語の香りに満ちていて、一步入ると新宿三丁目が江戸の町に変わるんですよ。寄席を知らない方も、末廣亭の前を通るとこの外観に目を惹かれるでしょう。

区長：末廣亭は文化・芸能の上でも、地域の歴史の上でも重要であり、区の地域文化財の第1号に認定されています。

たい平：落語には扇子で高座の板を叩く所作がありますが、その跡が無数にある所に歴史を感じますし、先輩師匠方に見守られているようです。私が好きなのは、寄席が終わってお客さんを送り出す太鼓の音がまちに響き渡る時間です。

区長：新宿は歌舞伎町のイメージが強いですが、新宿三丁目は末廣

亭があることで、昔ながらの独特な雰囲気があり、地域から人を惹き付ける不思議な魅力を感じます。

たい平：周辺の飲食店も他とは違う空気があり、常連のお客様が続いています。私がまだ前座の頃、師匠に連れられてお店に行くと、皆さん声をかけてくださって。

区長：末廣亭が絶えず人を引き寄せるので、個性豊かなお店が続いているんでしょうね。落語以外の新宿での思い出はありますか。

たい平：東京に出てきて初めて映画を見たのが歌舞伎町でした。美大生でしたので世界堂によく来ていて、今でも寄席の合間にちよこちよこ行っています。

区長：区内にはルミネtheよしもとや紀伊國屋ホールもありますし、新宿文化センターなどでも落語会が開催されています。住民の皆さんが落語会を開いている地域センターもあります。新宿は笑いが好きな人が多いまちだと思います。

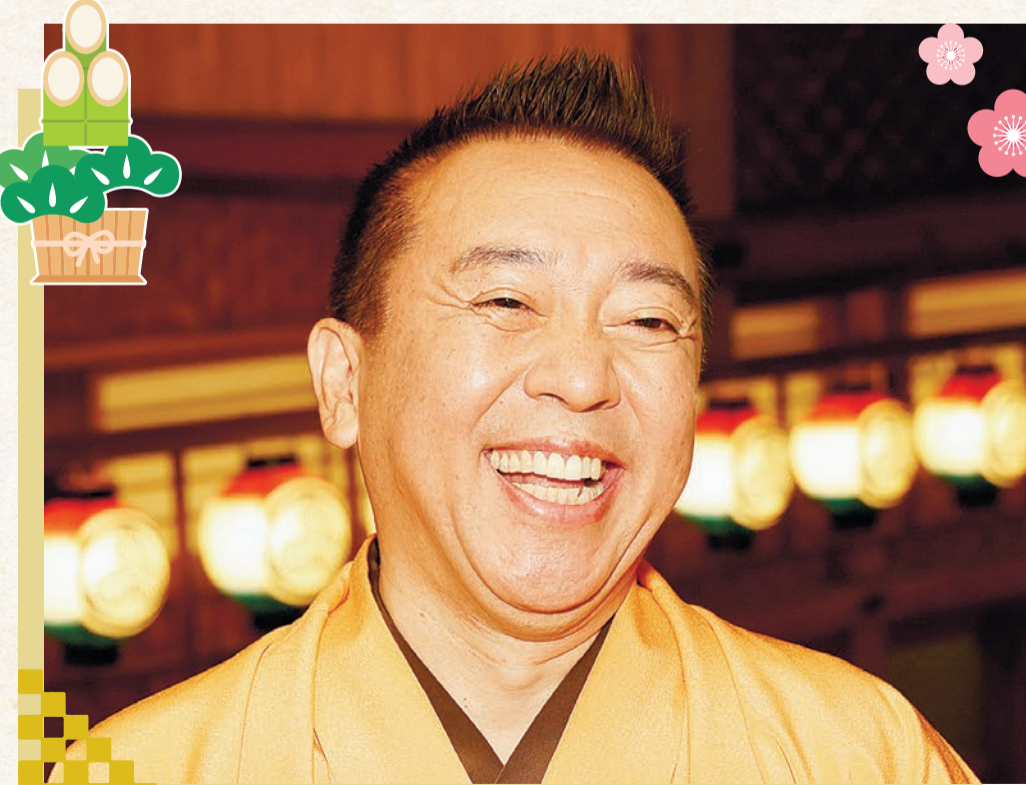
寄席を通して見つける人の魅力

たい平：区長さんは寄席には行きませんが。

区長：子どもの頃、親と行ったらしいのですが、私が途中で声を出してしまったのか、出演者の方に

たしなめられたらしく、以来、足が遠のいてしまったようで…

たい平：昔の寄席の音源を聞くと、子どもの笑い声も入っています。おじいちゃんが連れて来たり、親



落語家 林家たい平さん



笑いのまち新宿発 お正月対談

新宿には、落語や漫才などの笑いを楽しめる寄席や劇場などがあり、毎日、多くの人々に笑いを届けています。新型コロナで落ち込みがちの人々の気持ちを前向きにさせてくれる笑いの力について、区長と落語家の林家たい平さんが区内の寄席・新宿末廣亭で語り合いました。

コロナの中だからこそ見えてきたもの

子で来たりするのは、素敵な文化だと思えます。普段と違うお互いの顔が見られますから。落語を見てもらうのも大切ですが、落語を見て笑っている人を見るのも、寄席の魅力なんですよ。例えば寄席に会社の上司と来て、楽しむ上司の顔を見ると、その人の知らなかった面を見つけて距離が近くなった気がする。新宿はビジネス街なので、寄席で人間関係を円滑にすることもできますよね。

区長：確かに、笑いには人間関係を取り持つ効果がありますね。たい平さんの落語を始めたきっかけを教えてください。

たい平：大学時代にラジオで落語を聞いたのがきっかけです。こんなに心を軽やかにして「明日も頑張ろう」という気にさせてくれるものがあるんだと、非常に感銘を受けました。この落語をまだ聞いたことがない人に広めていきたいと、落語家を志すようになりました。

区長：コロナで落語家の皆さんもご苦労されているのではないのでしょうか。

たい平：1年ほど公演がなくなり、落語を聞いてもらう場所自体がなくなっていきました。一度活動の火が消えてしまうと、新たなものを作り出すのはとても大変なんです。落語の火を消してはいけないと、落語界では「寄席支援プロジェクト」を立ち上げて、クラウドファンディングを募り、多くの方にご協力をいただきました。活動ができない間、笑いではない方法で空いた時間を自分じゃない誰かの力になる使い方をしたいと思い、手ぬぐいを使ったマスク作りをしました。実家がテラーで子どもの頃からミシンに親しんでいましたので。

区長：空いてしまった時間で人のためにできることをやろうと行動されたのは素晴らしいことですね。

たい平：コロナ下の時間で落語の稽古だけでは見えないものが見えてきたところがあり、それが今の落

語にも生きています。

区長：YouTubeの配信もされていますよね。

たい平：ええ。息子が弟子になっていて、彼が編集からサイトへのアップロードまで担ってくれました。おかげで師弟関係とは別の視点で彼を尊敬でき、親子関係が深まりました。

区長：区には劇団の方なども多く、皆さんから発表の場が欲しいという声が上がっていました。そこで、オンライン配信の収録に必要な器具のレンタル費用などを補助したところ、多くの申し込みがありました。新宿の豊かな文化を担う皆さんのお力に少しでもなれたのではないかと思います。

たい平：不要不急と言われがちな演芸や演劇などに目を向けてくださるのは、アーティストにとって本当にありがたいことだと思います。コロナ後は、今度は自分たちが力になろうという気持ちにつながっていきますよね。

笑いの力で明るい日々を

区長：ようやくまちを歩く人の様子が変わってきたなと感じます。皆さんの笑い声が聞こえるようになってきましたから。

たい平：そうなんですね。まちに笑い声が響いているって、幸せな気持ちになりますよね。

区長：はい。笑顔が多い方が気持ちも上がりますし、笑うことの大切さを実感しますね。

たい平：笑えない状況が続いていた中で、久しぶりに思い切り笑うと、生きているってこういうことだって実感しますよね。それが笑いの一番の効能なのでは。笑うと温かい血が全身に流れるような気がするんです。自分が笑うのはもちろん、人が笑っているのを見聞きするのも、体の栄養になると思うんです。

区長：人が笑っていると、つられて笑っちゃいますよね。行政の仕事も同じところがあります。区民に喜んでほしいというのが基本で、イベントなどでも、笑ったり、感動したり、考えるきっかけにしたい。そのために、職員も楽しいと思って仕事をするのが大切だと思うんです。

たい平：お互いにサービス業というところでは、同じですね。

区長：はい。今回、コロナの感染拡大でマスクなどの基本的な予防策

が区民に身に付いたことで、インフルエンザなどの感染症の数が減る効果がありました。また、区内の学校では厳重な感染対策を行うことでクラスターを発生させずに小・中学校の運動会等の学校行事に取り組んできました。これまでに得た感染症への知見を生かして、子どもたちに修学旅行などの友人との思い出となる行事を体験させたいと考えています。

たい平：難しいことを進めるときこそ、トップが笑顔でいることが重要です。区長さんは職員の方にギャグを言ったりするんですか？

区長：時々…。滑っていますけれど。

たい平：それは素敵なことですよ。近くにいる人を笑顔にさせるのって、大切ですよね。

区長：ありがとうございます。今後の目標はなんですか。

たい平：コロナが落ち着いてから、みんなが寄席に足を運んでくれたときに笑うことがこんなに楽しいんだと実感してもらえるよう、より良い笑いを提供できるよう日々研鑽を積みたいですね。

区長：たい平さんにとって「笑い」とは。

たい平：生きるエネルギー！です。区長さんは？

区長：百薬の長、ですね。



新宿区長 吉住 健一